

奥能登鎮魂 25 首

奥能登は 島の髓なり むまれてしむで 生まれて死んで 珠洲は鈴鳴り

脳髓に 打ち込まれたる 木柱の 星座見上げて 真協和つなぎ

沖能登は 玄の玄なり イルカ星 点じて消えて 三密遊戯世（さんみつゆげゆ）へ

椿讃 出雲路ゆえの 幽(かく)れ里 出湯入湯に 湯醒め裸生（らしょう）ぞ

紋紋と いのちばらまく をろち舞 月夜をぬけて さちはこびつぐ

とほしべに めがみ たちゆく ひげだいこ やぶれかぶれの 大彦舞もと

幾山河 巻きに巻いての 晒しっ臈（くび） 血糊り袴の 意気軒高よ

男鹿女鹿（おがめじか） 濡れ行灯（あんどん） に 手を添えて 子連れの妣（はは）
は 朧なりけり

とてもなく 行方悲鳴の 仏具店 孫の手を借り 阿弥陀仏 仏

添え軸の きざはしさやげり 冷えたる能 この世の涯（はて）を 踏み外し跳ぶ

赤杭を 打つ手ひろげて 風を容れ

大文字（だいもん）送り火 赤龍狼煙（せきりゅうのろし）

祈願花 手折りて終に 捧げ往く

瑠璃光寺浄土の 七色の鳶

どの御位牌を遺します？ 仏壇トリアージ

いつ果てるなく 黄泉路常世路

吾はもう 諸国一見 すら見えぬ蛾 メコンラブラタ ガンガーエニセイ

遠野なる 地平も霞む 奥山の 森に埋もる いにしへごころ

飛び銀河 遍路往来 花入水 いのちからがら 踏み越えこえて

あらたまに 燃え比叡 山立つ山河（さんが） あおみどろ 巫女の緋袴 くない天女

流星は 諸行無常と 翔（か）けにけり 恐山ゆ比叡まで イタコ巡礼

語りとは 語り得ぬもの 招くわざ カルデラ噴火 イタコ憑霊

ガンならば往け 日輪の島へすぐ 時逆巻きて 身を隠す前に

外れた顎をはずしたまま 電車で飛び乗って有楽町へ行った

無数の始祖鳥は行方不明なれども 行く先も不明

ふところに夢精卵入れしまま抱き入水 安徳徳子の風車（かざぐるま）

ハルマゲドン 内臓垂れ流しつつ その日始祖鳥は 飛ぶ空をせつなく探す

三島由紀夫に捧ぐ

不二に立つ 茜天神 咲く花の 匂ふは おのが直霊（なほひ）なりけり
天籟裂け 地籟も割れて 人雷燃ゆ 火も水も皆 荒魂（あらたま）尽くし

鎌田東行、佐藤西行に捧げる 10 首

花祭り 鬼さえ鬼と 知らずとて まだ見ぬ君の 天の乳房か
いのちはてて 超えてゆくらむ 奥山を 照らせ今宵の 不死の新月
身も心も 尽き果ててなほ 息消沈 秋の気配に 立ち惑ひける
仏には仏の道の巡り花 神には神の魂寄りの歌
願うても願うてもうち砕かれて 木端微塵の流星の人よ
捨つるべき 何ごとのあるや 花時雨 道なき道に 拾う神あり

花折立待津軽鎮魂 16 首

「諸国一見の修験者」として京都・花折峠から津軽海峡(恐山・岩木山・立待岬)まで鎮魂供養の旅を続けて函館山の麓で佐藤泰志の霊と再会す。

花と散る 身も心もたましいも 立待の海に 沈みて浮かぶ
斬り合いの 言葉を捨てて 虚空（そら）を翔ぶ 花折峠は 今日も吹雪か
新古今 西行定家 後鳥羽院 言霊坂をともに 転びまろびつ
海峡ぞ 下北津軽の 晒し首 啄木修司に 御詠歌捧ぐ
恐山 行方不明の たま拾い 重波（しきなみ）跨ぐ 海遍路

差し違え 同行二人の 三密路（さんみつろ） 荒魂高鳴り 悉皆成仏

荒海を 割れたる胸に 刺し入れて 自力を離れ 遠岬往く

魂求（たままぎ）の 紺碧紅玉 宇曾利湖を 過ぎて ひといき極楽浜
都から 遠く離れて 顕幽（けんゆう）の 堺を越えて 星砕け散る
海峡を 越え逝く 幽霊船（たまぶね）に 吾は身を投ぐ 彼岸花とも
ひるめしは まだかはだかで うみにいる ところをはてなし かつぶくのはら
たまきはる いのちかがやく 春の海 生死（しょうじ）の道の 行方知らずも

ひのもと は あめつちかみひと やほよろづ

いのちのうみに うかぶまほろば

ふとまにの みかがみきよく ながれつく

よしのまほろば てんかはしみづ

うつせみの なくそよこそ くしびなれ

かみむすひたけび ほしとちるらむ

とこしへの とこよのとこを とことこと

ひたすらあゆみて とこわかのゆめ